

# 囲碁放浪記

北野寿囲碁同好会 刀根 正樹

囲碁を覚えたのは海の上であった。私は、新入社員であった。函南丸という捕鯨母船に乗っていた。南極の魚場まで1月近くかかる。デッキにゴザを敷き碁盤に石を並べた。赤道を越えると水平線上に南十字星が顔を出した。少女のように純白で可憐な姿だった。囲碁人生の胸のときめく幕開けであった。

魚場に着き、鯨の巨体がデッキを占領した。碁を楽しむのは時化で鯨が捕れない日だった。碁盤に水をかけ石が滑らないようにした。大時化の時は濡れ手拭を盤上に敷いた。窓の外を冰山が流れて行く。大皿に鯨の尾身の刺身を盛りウイスキーのコップ片手に石を取り合った。



函南丸

帰国して釧路に勤務した。近海捕鯨の基地で夏から秋にマッコウ鯨が揚がった。駅の近くに粗末な碁会所があった。数人の老人がわめきながら打っていた。私はまだ5級程度で誰も相手にしてくれなかった。近くの焼き鳥屋で烏賊焼きを食べ悲哀を噛みしめた。帰路、北斗七星が無情に輝いていた。

その後、私は八王子市北野に新しく建設された食品工場に勤務した。その頃、北野はまだ田園地帯だった。ある日、東京本社に出張し帰途新宿の歌舞伎町で一人酒を飲んだ。大衆的な碁会所があり、かなりの盛況であった。やせたマダムが案内に立ち、鼻ヒゲのある紳士を紹介してくれた。ヤクザかと思ったが意外にマナーが良くスマートな棋風であった。意気投合して、紳士とゴールデン街の「飛翔」というバーに行った。マダムのオリュウさんは、お茶水大卒で数年後長谷百合子という本名で参議院議員になったのには肝をつぶした。

10年が流れようやく初段に手がとどいた。市ヶ谷の日本棋院で会社の囲碁大会があった。売店で櫃の碁盤に見とれていると紫色の着物を着た老女が声をかけてきた。名のあある女流プロということであったが私は無関心だった。大会後、1階の食堂で宴会があった。座敷は簡素で襖もなかった。料理は懐石風であてやかであった。酒は新潟村上の久

保田だった。北野の南口に碁会所ができた。ホラワタ(ほら吹き渡辺の略)という老人が現れ猛威をふるった。木谷門下で修業し小林泉美プロとも友人という。ともかく強い老人であった。まるでレベルが違っていた。私は三段で打っていたが月例会で優勝し四段となり駅前の「養老乃瀧」に行き焼酎で乾杯した。

50歳になり海外を旅した。ロシア出張の途中ウズベキスタンを放浪し、更にタジギスタンのペンジケントの遺跡をさすらった。グループの中に碁の好きな老人がいてしきりに囲碁の話をした。シシカバブという羊の肉を金串に刺して豪快に焼いた料理、ジュースのように甘いワイン、タジクの娘が魅惑的な大きな腫で微笑んだ。

『爛柯堂(らんかどう)碁話の書に日蓮上人の碁譜があるが天然自然、勝負を超越し、悠久の時の流れを感じる。宇宙の星座のような輝きがある。』良い碁友が多いようである。本をよく読んでいた。何よりも碁を深く愛していた。『人生は旅行なりという。考えてみれば私も日蓮の魂のように宇宙をさすらっているのかもしれない。彗星のように、流れ星のように』

平成20年74歳になった。私はまだ囲碁の宇宙を放浪しているらしい。碁楽連で各支部をめぐり生きいき大会に参加し無上の喜びを感じる。血圧が上昇して酒は飲めなくなった。あと何年碁を楽しめるだろう。見上げると抜けるような夏空の天元に太陽が笑っていた。

(碁楽連だより 第204号 2008年7月26日)